

第 11 期第 1 回岸和田市文化振興審議会会議録

1. 審議会の名称	第 11 期第 1 回岸和田市文化振興審議会
2. 開催日時	令和 2 年 2 月 7 日（金）午後 2 時～午後 4 時 20 分
3. 開催場所	岸和田市立文化会館 創作実習室 2
4. 公開・非公開の別	公開
5. 出席者	稲垣委員、長田委員、金森委員、木津川委員、小末委員、 齊藤委員、田中(範)委員、田中(幸)委員、塚本委員、早田委員 平松委員、溝川委員 以上 12 名
6. 欠席委員	なし
7. 事務局	大西魅力創造部長、田中文化国際課長、田宮参事 中島担当員、山本担当員、清水担当員 以上 4 名
8. 傍聴者	なし
9. 次第	1. 開会 2. 委嘱式 3. 副市長挨拶 4. 自己紹介 5. 経過説明 6. 会長・副会長の選出 7. 議題 (1) 文化振興計画の進捗状況について (2) 文化振興事業について 8. その他 9. 閉会
10. その他	
会議録承認	令和 2 年 3 月 3 0 日

次第

■ 1. 開会

■ 2. 委嘱式

■ 3. 副市長挨拶

■ 4. 自己紹介

■ 5. 経過説明

資料 3～5 により説明。

■ 6. 会長・副会長の選出

会長に木津川委員、副会長に金森委員が就任。

■ 7. 議題

(1) 岸和田市文化振興計画の進捗状況について

「文化花咲かそう推進プラン」概要版・冊子に基づき基本目標について説明。資料 D、資料 6 に基づき平成 30 年度の庁内における取組みについて説明。庁内関係課 29 課、事業数は 73 本となり、例年から大きな変化はない。

資料 A-1、A-2・B・C に基づき、平成 30 年度の浪切ホール、自泉会館、文化会館の取組みについて説明。

(委 員) 資料 6 を見ると、基本目標Ⅲ-7 の芸術家の活動拠点の創出の検討に関する事業数が、平成 29 年度に引き続き平成 30 年度も 0 になっている。この事業について、今後の進め方など何か構想・イメージがあれば教えてほしい。

(事務局) 大きな芸術祭などで、制作に一定の日数がかかる場合は、芸術家を招いて実際にその地域に住んでもらい、地域住民とワークショップや日常生活で関わり合いながら制作を行うことがある。これは、「アーティスト・イン・レジデンス」というが、様々なところで耳にする言葉になっている。最近だと、兵庫県の豊岡市等がこのような事業に力を入れているし、他市でもそのような事例があることは、当課も把握している。

一方、本市でこの事業ができるのか、ということを考えると、大きなハードルがあると感じている。平成 28 年度に実施した「竹×アートとのであい」で、メイン作品の芸術家が静岡県在住の方であったため、本市に 1 か月近く滞在された。その際、アーティスト・イン・レジデンスのような形がとれないかと考えていたが、結果的にマンスリーマンションに滞在されることをご希望されたため、実現しなかった。

また、昨年、岸和田市少年少女合唱団が海外から指揮者を招いて公演とワークショップを行ったが、指揮者には滞在中、ホームステイをしていただいたと聞いた。市は関わっていないため全てを把握しているわけではないが、市民団体の活動の中でもアーティスト・イン・レジデンス的なことをしている事例はある。

理想的なことではあるが、公共施設の余剰スペースや空き家を利用するなど色々な形で、たとえ短期間であっても、アーティストや地域住民に良い影響を与えられるような機会が提供できれば良い、とは考えているが、実施に至っていないのが現状である。

(委員) 事務局に確認したいことが一点ある。庁内の文化的事業に対する事業費が 2 億 1,681 万円ということだが、昨年度の事業費と比べてどうなのか。また、来年度の予算はどうなのか。

(事務局) ご説明した事業費は、平成 30 年度の数字であるが、前年度と大きな変化はない。ただし、この事業費にはだんじり会館等の指定管理料が含まれ、これが大きなウェイトを占めているため、厳密にはこれを文化事業費と断定することは難しい。現在、令和 2 年度の予算が固まりつつあるところだが、この予算が平成 30 年度と比べてどうなのか、他課の予算も含まれているため把握できていない。

(委員) 資料 D を見て、庁内の文化事業は 73 事業あるということだが、事業費だけに着目すると、1,000 万円を超える事業が 6 事業（自動車文庫事業、読書活動事業、岸和田城管理事業、だんじり会館指定管理事業、だんじり祭支援事業、観光振興事業）ある。この 6 事業で事業費が約 1 億 6,000 万円となり、約 2 億 1,600 万円の全事業費の中で約 74% を占めている。限られた予算を効率よく使い、より良い事業を実施するためには、大きな予算を持っている事業を見直す必要があるのではないか。

(会長) 市に対する提案なので、聞いてあげてください。

(委員) 岸和田の祭り文化は、全国に知れ渡っているが、岸和田は怖い街というイメージがある。その中で、祭り・だんじり文化の伝統を継承していくため、「日本の祭り」という 1 つのくくりで、無形文化財としてユネスコに登録するという動きがある。郷土文化課が担当していたように思うが。

(事務局) 以前話を聞いたことはあるが、どのように進んでいるのかは分からない。

(委員) また、土生の鼓踊りや葛城踊りなどは岸和田の人でもあまり知らない。これらを、どう継承していこうとしているのか。それから交流という面で、外国との交流についても資料に記載があるが、そのことについて説明願いたい。

(事務局) 確かに、だんじりを無形文化財にしようという話は一時期あったと思うが、それは市だけで決められるものではない。祭りの実施主体なども関わるため、様々な制約があるようだ。

土生の鼓踊りについては、盆踊りとして駅前で開催しており、町が大きいこともあって参加者も多く、小学生に教えるなどもしている。行政からは、わずかではあるが、継承のために補助金が出ている。葛城踊りも同じような形態ではあるが、子どもが主体の踊りであるため、少子化が進む中、継承することは難しい、という話は聞いている。これらは無形文化財となっているため、現状は郷土文化課の管轄になっている。文化国際課が今後どう協力していけるのか検討していきたいと思う。

国際交流については、中国2都市と韓国、サウスサンフランシスコの全4都市と交流はしている。韓国については、岸和田市文化協会を通じて作品を送り合ったりしている。過去には、サッカーを通じた交流をしていたこともあったが、最近はしていない。去年は、韓国の来岸予定が諸事情により無くなり、先日 KIX 泉州国際マラソンに出場予定だった上海の選手の来日取りやめが決定した。韓国や中国との交流は、政治的な要素が関わることもあり、なかなか進んでいないのが実情である。現市長は、海外にもっと目を向けたいという意向を持っているため、様々な交流の可能性を委員の皆さんから意見をいただき、考えたいと思っている。

(委員) だんじり祭りだが、少子化が進み、青年団の人数が一桁という町がある。その中で祭り文化をどう継承していくかが大事。山・鉾・屋台行事は、ユネスコに無形文化遺産として登録されたが、岸和田のだんじり祭りは無形文化財に手を上げて取り組んでいる。この機会にユネスコに登録されれば、また違った面で岸和田も活性化するのではないかと思う。

(委員) だんじり祭りについて話が出ているが、この文化振興審議会はだんじり以外の分野で文化を推進するための協議の場、と認識していた。違うのか。

(会長) 岸和田がだんじりだけの地域であってはいけない。地域コミュニティーの核としてのだんじり文化を守りながら、広く市民文化を推進させる方策を練る場だ。

(委員) それに関して、私も提案させてほしい。私は、子どものときから岸和田市に住んでいるが、私達が子どもの頃は、城内小学校に、子どもオーケストラという

クラブがあり、音楽に力を入れている先生がいた。だんじり以外にも、音楽に力を注ぐ地盤が岸和田にはあるのではないか。私は、民間の団体ではあるが、岸和田市出身の方や岸和田にゆかりのある方のコンサートをできるだけ企画したいと思っている。民間の団体だけでやろうとすると非常に大変なところはあるが、各所協力しながら、音楽の面でも岸和田市を盛り上げられたら、と思っている。

(会 長) 大事な意見ですので、受け止めていただきたい。

(委 員) マドカホールの開館前、岸和田市に「新しい文化ホールを考える会」という会があり、開館後に解散せず、そのまま岸和田文化連絡協議会という民間団体になった。現在、活動の中で、関係者内だけでの事業をするのではなく、市民向けにも事業をしようという流れがあるが、この文化振興審議会の中では文化行政が主催の事業に関する説明しかない。私たちのような民間団体の活動も資料に載っていたら嬉しい。私たちは、1年に2回、舞台発表と展示を行っている。市展や市の文化祭のような大きなことはできないが、会員から会費を徴収して、その中で色々なことに取り組んでいる。金銭的にしんどいところもあるが、会員は岸和田の文化のために、という思いでやっているのだから、この文化振興審議会の中で民間団体の活動についても少し考えてもらえるとありがたい。

(2) 文化振興事業について

資料8、浪切ホール機関紙ナミナミ、自泉会館広報誌ふおんて一ぬにより、令和元年度の文化事業について説明。

(委 員) 私は書道家だが、子どもたちに関わりたくて、2年前に書道家としての活動をやめ、自泉会館での活動に力を入れ始めた。活動をする中で思ったことが、親と一緒に子どもたちが館に来られない現実がある、ということだ。私が岸和田で子どもを育てていた時は、親子劇場など子どもが参加して親と仲良くなれるような大きな場所があった。同級生のお母さんに誘っていただき親子劇場に入ったが、子どもに鑑賞と同時に、鑑賞の中に入っていくための道具を作る機会を与えられた。また、親同士が仲良くなることで情報を共有する仲間ができ、素晴らしいと感じた。

仕事を一生懸命やり遂げ、子どもが独り立ちした後、もう一回仲間と一緒に何かしようと思って岸和田文化事業協会に入り、先日ファミリーコンサートを企画したが、親が忙しいのか、文化的なことに関心をもつ土壌でなくなったのか、多くの家族に来ていただくことができなかった。今の子どもたちは、スマホ一つで世界のことを知ってしまうので、足を運んだり、親から情報をねだったりすることもなくなり、親自身もスマホで情報を手に入れる時代になった。その中で、私たちが子どもたちに生のものを見せたり、触らせたり、そのような機会をいかに

広げていけるかということを見ると、やはり子どもたちに知らせるだけでなく、親に知ってもらわなければならない。それが、今一番私たちが使命としていることで、何が出来るか手探りしている状態。今の世の中があまりにも早く動きすぎて、子どもたちは見過ごすことが多いということに、親も怖さを感じていない。このスピード化はどうすればいいのか、私たちのレベルを超えた全国的な問題なのかな、とジレンマを感じている。

(会 長) 今、委員がおっしゃったことは非常に大切なことだ。親子劇場の経験を語られたが、大阪の親子劇場の運動は枚方から始まり、大阪中に広がったものの、既に親子劇場は姿を消してしまった。それは少子化のせいだと言われているが、地域に子どもが少なくなるとはいえ子どもの数が0になるわけではないし、現在でも何百人・何千人の子どもたちがいる。この子たちを、少子化を理由に見捨てるわけにはいかない。枚方から始まった親子劇場だが、現在は枚方からも姿を消してしまった。さらに、大阪府下で、文化活動のリーダーシップをとってくれる人材がいれば良いが、大阪府は人材がいない都市になってしまった。岸和田市には委員のような素晴らしい人材がいる。行政に頼るのも、注文をつけるのも、市民が自ら動かないことにはどうにもならない。岸和田から大阪一帯に良い影響を広げて行ってほしい。

(委 員) 先日、文化祭事業の中でドラマスクールの演劇を初めて鑑賞したが、レベルも高く、すごいと思った。育成団体について少し伺いたい。

(事務局) 育成団体は、合唱、吹奏楽、演劇の3つの分野があり、少年少女合唱団に約50人、音楽団に約50人、ドラマスクールに約20人が所属している。合唱団は原則日曜日に通常練習を行いつつ、年1回マドカホールで定期演奏会も行っている。それ以外にも、各地で発表したり、独自で演奏先を開拓したりしている。令和2年度は、6回目の欧州公演でスペインに行く計画もしている。市は、練習会場の提供、指導者への謝礼の一部負担、定期演奏会の舞台の提供をしているが、団の活動自体は、保護者や役員が運営している。音楽団は年齢層が高いため、団員自らが運営しているし、ドラマスクールに関してはプロの指導者も関わっている。先ほどお褒めいただいたドラマスクールが抱える問題は、演劇をやる子どもが少なくなっていることである。今の子どもの傾向として、長く続けること、根気が必要なことが苦手である、と感じる。

(委 員) 昨今子どもの数は激減しており、少年少女合唱団としては、団員数を増やすことに苦勞している。団員は小学校3年生から高校3年生までおり、小学生はジュニア、中高生はシニアとしている。そして、今年度は、6回目の欧州公演がある。先ほど事務局から説明があったように、2年前にスペインから指揮者を呼んで演奏会と、ワークショップを開催した。また、浪切ホールで行われる公演に児童合

唱として出演させてもらうことになり、今練習に励んでいる。様々なチャンスを手繰り寄せて、子どもたちに挑戦してもらえ環境を、大人が作っていくという形で活動をしている。

一方、先ほどからご意見が出ているように、団の活動には子どもたちの後ろにいる保護者の動向が大きく作用している。保護者の都合により、突然、本番前の欠席や練習の不参加が起こる。昔の子どもたちは、自転車など自力でマドカホールに来ていたが、今はほとんどが保護者の送迎に頼っている現状がある。資金の面でも、大人の合唱団は自分の楽しみのために自分で対価を支払うが、子どもの合唱団は自分でなく保護者が支払うことになる。環境の変化等と日々格闘しながら、前に進むため様々なことにチャレンジしている。

(会 長) 前に前に、頑張ってください。

(委 員) 私も親子劇場に長らくいた。残念ながら親子劇場は解散したが、その後親子劇場に関わっていた者で、年に1回、「こども演劇祭 in きしわだ」という浪切ホールで子ども向けの演劇を上演する活動をしている。先ほどの委員の意見にもあったように、子どもたちが、演劇に触れることや色々な遊びをすることに興味を持って、参加費が必要だとか、そこに来る足がないという大人の都合で、子どもが参加できない状況がある。親が、お金を出してまで行かなくていいじゃないか、家でゲームしとけばいいじゃないか、と考える風潮の中で、生の舞台から得られる感情や成長の必要性を、親にいかに浸透させていけるのか、親にどれだけ目を向けてもらえるのか、日々仲間と悩みながら考えている。

(委 員) 私は、マドカホールで20年前からダンススタジオを主催している。2年前に一旦引退して、現在は障害者や老人、ミセス向けにダンスを教えている。今はどの市でも、障害者に健常者と同じことができる場を作るべきだ、と言われているが、なかなか難しいのが現状。昨年、障害児を舞台に出させてあげるため、市役所に舞台代だけでもなんとかしてほしい、と相談したがなかなか乗ってくれなかった。今回の審議会には、他の様々な団体の方と交流することにより何か得られるものがあるのではないかと考えて、参加させてもらった。

今まで、2歳から90歳までダンスを教えてきたが、本当に時代は変わったと思う。スマホやYou Tubeの影響は大きく、今の人はモノを見たり考えたりすることがなくなった。

(会 長) 大変な時代になってしまった。だからこそ文化が大事だ。

(委 員) 私は、町会連合会の一員として参加させていただいている。個人的なことだが、マドカホールの近くに住んでおり、馴染み深く感じているが、この審議会に出席して、岸和田市の文化行政が文化国際課により舵取りされていたのだと知った。

また、資料Dを見て、年間を通じて多くの職員が様々な事業に携わっており、岸和田市の文化にこれだけの力が注がれていることに脱帽した。
今後は町会においても、文化的な活動に対してもまじめに向かい合い、協力できたら、と思う。

(会 長) この審議会で議論をしながら、市の文化を推進していることを知ってもらえた。
岸和田で市民文化の花を咲かせるためにこの審議会を開催しているのです、これからも協力していただきたい。

(事務局) 委員の皆様の意見を聞いて、文化振興計画作成時の議論を思い出した。文化の分野で親子向けの活動を行うのはなかなか難しい。公園を見ると、サッカーなどを楽しんでいる親子はたくさんいる。決して、親が子どもについて行かないというわけではなく、子どもの嗜好趣味が、テレビで見るスポーツなどに向いているからだと思う。幼い頃から子どもたちに様々な感性を与えることにより、子ども自らが保護者に「サッカーがしたい」と言うのと同じレベルで、「演劇がしたい」、「音楽がしたい」、と言ってもらえることが、将来に繋がるのではないかと考え、文化振興計画を策定するときに、次世代、特に子どもに焦点を当てることとした。文化国際課としても、アウトリーチで保育所を回るなどしながら、できるだけ子どもたちの感性を広げられるような活動を進めていきたい、と考えている

(副会長) 岸和田市の「文化花咲かそう推進プラン」のように、文化振興計画に副題を付けている市はあまりない。また、他市の計画では、子どもについての記載は1行か2行程度しかないのに対し、岸和田市は多い。今回の審議会では、子どもとの関わりがある方が多く心強く感じているが、実際具体的にどうするかという話にはなかなかならない。こういった公式の場でなくても、非公式の場でもお互いに話を聞いたり、相談したりすることで文化活動のヒントを得てほしい。文化は人から与えられるものではなく、自主的に、主体的に創造していくものであり、クリエイティブな物の考え方、進め方が大事になる。

(会 長) 大阪はかつてない人材払底都市となっている。大阪には芸術家がいなくなり、文化人も育たなくなった。大阪から大企業が東京に流出し、大阪経済が沈滞して今日に至る。流出したのは大企業だけじゃない。人材も流出した。昭和38年から、大阪府と大阪市が「大阪芸術賞」と「大阪文化賞」を毎年一人ずつ贈呈してきたが、贈呈する芸術家がいなくなったため、平成21年度からは大阪芸術賞を廃止し、大阪文化賞に一本化した。今から30・40年前は、芸術・文化の領域で長年活躍し、成果を上げ、日本的レベルで知られた文化人が大阪にはたくさんいたが、現在では大阪文化賞を贈るべき文化人もいなくなり、旬の活動をしている人という苦し紛れの対象者探しをしている状況である。都市の文化が衰退する、都市の格が低下すると大企業は流出してしまう。

1999年、武田製薬が中央研究所を大阪市内から神奈川県藤沢市に移した。なぜかという、中央研究所を大阪市内に置いておくと、優秀な人材が集まらないからだそう。製薬会社は激しい国際新薬開発競争の中にあり、新薬開発に遅れをとらないため、優秀な人材を中央研究所に入れないといけませんが、大阪に研究所があると人材が集まらない。集まらないどころか、ごくわずか残っていた文化人も大阪から出て行ってしまった。文化が衰退すると、都市格が低下する。すると、大企業が出ていくだけでなく、人材も逃げ出していく。今、大阪はそういう都市になってしまった。

今回の会議資料の中に、岸和田市民が年間3.1回文化施設を利用したという数字が載っていた。たった3.1回か、と思われるかもしれないが、272万人の大阪市民の割合で言うと、約800回大阪市内の文化施設を利用したという割合に匹敵し、考えられないことだ。ご当地から、どのような文化人が生み出されるかが大事になる。塩田千春さんが岸和田市出身で、国際的に活動し、評価を受けているということだったが、これは誇るべき岸和田の文化である。このような人を岸和田市はまだまだ発掘、育成する必要がある。また、19,000人が文化的な催しに参加した、という数字も報告にあり、岸和田市民が文化に関心を持ち、文化的な催しに携わっている・足を運んでいるということも知った。文化活動に携わる方においては、それぞれが役割を心得て、前へ進むよう取り組んでいきましょう。

■ 8. その他

来年度中には、全ての市立文化施設において長寿命化計画を策定予定。次回の審議会で計画に対する意見をいただきたく、次回は夏～秋ごろの開催を予定。

■ 9. 閉会